



Title	5. つながり創出から可能性と多様性の提示へ : 2011年度後期を振り返って
Author(s)	平, 侑子
Description	第2部: 可能性と多様性を提示するピア・サポート
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書 (平成23年度版) p.61-69
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49495
Type	report
File Information	05.taira.pdf



5. つながり創出から可能性と多様性の提示へ

—2011 年度後期を振り返って

平侑子¹

1. はじめに

2011 年 10 月、北大ピア・サポートが発足 3 年目を迎えるにあたって、代表を引き継ぐこととなった。これまでの活動では、学生や学生支援組織とのつながり作りが活動の大きな方針として挙げられていた。発足当初は訪れる人もまばらだったが、学生や学内組織との関係性を重視することで、現在は月 500 人ほどの来室者を迎えるようになった。さらに、2012 年 2 月現在も、いくつかの学内組織との合同イベントの企画が予定されている。

今年度後期からは代表交代に伴い、ピア・サポートでは新たな活動方針を打ち出すこととした。本章では、今年度後期以降の活動方針「学生生活の可能性と多様性の提示」を紹介する。第 2 項でこの方針を打ち出すまでの経過を振り返り、第 3 項で方針の内容を説明、第 4 項で計画を実行に移した後期のイベントを紹介する。そして、第 5 項でピア・サポートがこの活動を行う意義とこれからに向けての抱負を述べる。

2. 活動方針を打ち出すまで

これまで北大ピア・サポートでは、本活、ピア・カフェ、広報ビデオ撮影等、特にイベントを重視した活動を行ってきた。しかし、代表交代時にはその後のイベントを一つも予定しておらず、結局 10～11 月は通常業務のみで過ごすこととなった。2 カ月間もイベントを計画せずに活動するのは、北大ピア・サポートが設立されて初めてのことである。11 月の第 2 週には将来的な開室時間の延長を見据えて、月曜日から金曜日までの 5 日間、12 時から 18 時までの開室を試行したが、その時も何か企画を添えることはしなかった。これは新代表として、まだ新たな企画を立ち上げるほど馴染んでいないと考えたため、そしてサポーターの半分以上が今年度で卒業するので論文執筆を控えた学期に大きなイベントは避けようとしたためなどいくつか理由はあるが、この消極的な姿勢が却ってピア・サポートの業務に悪影響を及ぼしたようである。

11 月の中旬になると、サポーターから「入室者が減っている」「部屋に活気がない」との声が聞かれるようになった。しかし、これまでの入室者数と照らし合わせたところ、入室者が減っているわけではない。前期でイベントを開かなかった 6 月の平均入室者数は一日 35.4 人であったが、10 月は 37.6 人、11 月は 45.1 人であった²。つまり、前期よりも入室者数は増えているのに、新たな目標がないままに通常業務を続けたため、「入室者数が減っている」との思い違いをしていたということである。いずれにしろ、11 月にはサポーターの

¹ 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

² 11 月の第 2 週は通常より 2 時間多い 12 時から 18 時の開室であったため、その分の人数は加算されている。

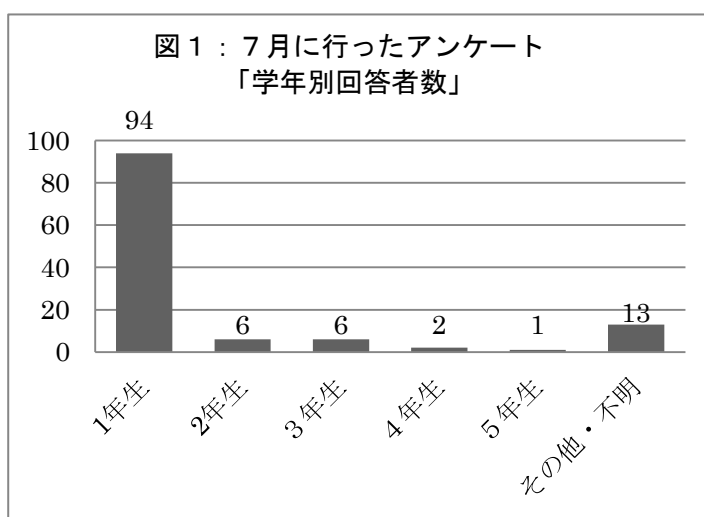
モチベーションは低下し、各々が活動に停滞感を抱くようになっていた。

11 月後半になると、「私達は何のために活動しているのか」という疑問と共に、一方で複数のサポーターから活動の再活性化のためにイベント実施の提案がなされた。もちろん、提案されたイベントをそのまま実施することも可能だったが、取敢えずイベントを開くというだけでは、この 2 カ月で問い始めた「私たちは何のために活動をしているのか」という疑問は解決されないように思えた。そこで、一度サポーター同士で十分に北大ピア・サポートの活動を見直すこととした。ここで立ちあげられたのが、通称「かまモン化計画」と呼ぶ新たな活動方針である。以下に、「かまモン化計画」の実施に至るまでの経緯と計画の内容を説明する。

3. 「かまモン化計画」の内容

3. 1 1 年生だったときを振り返って

現在、ピア・サポート室の入室者の多くは 1 年生である。7 月のカフェ期間にアンケートを行った際も、122 人の回答者のうち 94 人は 1 年生であった（図 1）。これは、ピア・サポート室の立地が 1～2 年生がよく利用する教養棟に近いことと、今年度の 4 月に、1 年生を中心とした広報活動を行ったためだと考えられる。ピア・サポートは「学生による学生支援組織」であり支援の対象は学生全体に及ぶべきだが、



我々の場合、主な来室者が 1 年生であるため、自ずと 1 年生に向けた支援が多くなる。では、1 年生はどのような支援を必要としているだろうか。履修相談や道案内以外に私たちができる支援を考えるため、まずは我々が 1 年生の時に何を必要としていたのか、何に不安を持っていたのか、どのようなことが気になったのかを振り返ることとした。サポーターからは次の様な意見が挙げられた。

・ 空きコマを一人で持て余すとき、寂しかった。
・ くつろげるところが欲しかった。
・ 一人になれる場所が欲しかった。
・ 大学生活 4 年間のプランを何度も考えた。
・ 何年生が何をしているのかというのを知りたかった。
・ まわりが忙しくて自分が暇だと、これで自分の学生生活は大丈夫なのか不安になった。
・ 高校時代のノリでクラスの友達と意味もなくつるんでいたが、このままでは流されてしまっていけないと思った。

・学部の先輩との縦の繋がり、まわりの学生との横の繋がりづくりを行って、いろいろな情報を得ようとした。

これらをまとめると、我々サポーターが1年生の時は、構内で自分の居場所となる空間や、自分の大学生活を考えるための材料を求めていることが窺える。前者に関しては、昨年度9月からピア・サポートでオープンスペースを運営し、居場所の提供を始めている。一人でも入りやすい雰囲気を心がけ、最近では1人で弁当を持ち込む学生も増えている。後者に関しては、今回いくつかの議論がなされた。まわりがどのような生活を送っているのかを知りたいという気持ちの一つには、まわりと同じ線上に「横並びでいたい」という安心感を求めている状態が挙げられる。しかし一方で、「皆と同じで終わりたいではない。特別なことをしたいが、やり方がわからない」という向上心があるのではないかとの意見も寄せられた。例えば、「留学をしたいと思った。そのために休学をしたら今の学年から1年繰り下がることになる。皆と同じラインから外れることになり、それは『自分の道を歩んでいる』満足感には繋がるものの、一方でやはり不安もある。留学した人の経験を知りたかった。」という意見があった。いずれにしろ、1年生の時に他の学生が何をどのように取り組んでいるのかを知りたかったという思いが、どのサポーターにも見受けられた。

しかし実際、同期や先輩がいつどのようなことに取り組み、何を感じていたのかということは、気になったとしてもなかなか聞き出しにくいだろう。同じ学部やサークルならまだしも、全く接点のない人からの情報は入りにくい。知りたいけれど知る術がないというこの点こそ、ピア・サポーターが取り組むべきことの一つであると結論づけた。

3. 2 総合入試を受けて

我々が1年生の時を振り返ると同時に、さらに、今年度から北海道大学が新たに取り入れた総合入試制度についても考えた。総合入試とは、「『入学後に学ぶ内容や所属したい学部を決めたい学生』のために、入学してからの1年間、自分が本当に学びたいことは何なのか、将来どのようなことをしたいのか、を十分考えた上で学部・学科へ移行することができる」制度である（「総合入試案内パンフレット」）。これにより、1年生の中には学部が決まっている学生と、決まっていない学生（総合教育部）がいることとなった。文系は625人中100人（16%）、理系は1860人中1027人（約55%）が2年生に進級する時点で学部を選択することとなる。しかし、当然全ての学生が希望の学部に行けるわけではない。本人の希望と、特定の科目の成績（移行点）により、各々学部に分けられる仕組みとなっている。総合教育部の学生にとっては、入学試験の後にさらに1年間かけた受験が続くとも言える。

今年度、ピア・サポート室にも多くの総合教育部の学生が訪れた。彼らの中には、「私は、自分がやりたい研究をするにはどの学部がふさわしいか吟味するために、総合教育部に入った。ピア・サポートで各方面の先輩から話を聞きたい。」という学生もあり、まさしく総合入試制度を上手く活用している姿が見られた。しかし一方では、総合入試に入ったもの

の多くの悩みを抱えている学生も見受けられる。その例を次に挙げる³。

例1. 行きたい学部を目指すには、移行点が足りない。再受験を考えて、退学しようと思うが、退学届はどのように出したらよいのか、受理されるまでにどれほど時間がかかるのか教えてほしい。

このように、特定の学部を目指していたが成績が思わしくなく、前期の時点で退学を考える学生もいた。現状、総合入試の学生は、移行に十分な成績を獲得するために、他を顧みず一つの学部を目指さなくてはならない状況にいるのかもしれない。しかし、相談を受けるサポーター側としては、本当に進む道は一つしかないのか、他の学部を考えてみるのも一案ではないだろうかと思いがゆい思いもあった。さらに、

例2. 高校時代、理科の選択科目では物理を選ばず生物ばかりやってきた。現在も生物の授業しかとってなくて、学部も理学区の生物科に進もうと思っているのだが、成績が足りなさそうだ。他に生物を学べるところはないか。

という類の質問もいくつか寄せられていた。この例のように、特定の学部を目指すのではなく、特定の分野の研究ができるところという基準で学部を選ぶ学生も多い。しかしよく話を聞くと、一部には、「生物」を選んだ理由は高校で選択していた科目だからであり、本当に学びたい分野が何かはあまり考えたことがない、という学生も見受けられた。他にも、

例3. 子供に興味があるので教育学部に進むのが良いように思うが、どうだろう。

という相談もあった。この相談を受けたサポーターによると、話を聞いていくうちに、まだ興味の方向性が固まっておらず、学部の情報もあまり正確にわからない様子が窺えたと言う。

これまでの学部入試では、「本当に自分が学びたいこと」を見出せなかったり、「本当に自分が学びたいこと」と「所属する学部で学べる内容」が合わず、悩む学生も少なくなかったという（「総合入試案内パンフレット」）。しかし、例2のように「高校で選択していたから」「高校で得意な科目だったから」という理由で学部を決めてしまったり、あるいは例3のように十分に吟味できていない状態で学部を選んでしまったり、移行後にこれまでの学部入試と同じ悩みを抱える生徒が増える恐れがある。

総合入試のメリットは、1年間の大学生活を通して、自分が本当に学びたいことを明確にし、それにふさわしい学部・学科を選べることである。日々の相談業務などを通して、自分で積極的に様々な学部の研究室をまわって吟味する学生がいる一方で、総合入試のメリットを生かせずに悩んでいる学生や、後々悩むことになるかもしれない学生がいることがわかった。

以上、自分たちが1年生のころを振り返り、また今の1年生の様子を見ることで、後期のピア・サポートでは、「自分が想定している以外の大学生活のあり方」や「進路は一つではないこと」を示す必要があると考えた。すなわち、「大学生活における可能性と多様性の提示」である。

³ これらの例は個人の特定を避けるため、曖昧な表現に直して記載している。

3. 3 「かまじい」と「メタモン」という2つの概念

「可能性と多様性の提示」という新たな活動方針が決定したが、それをどのように形にしていけばよいかである。

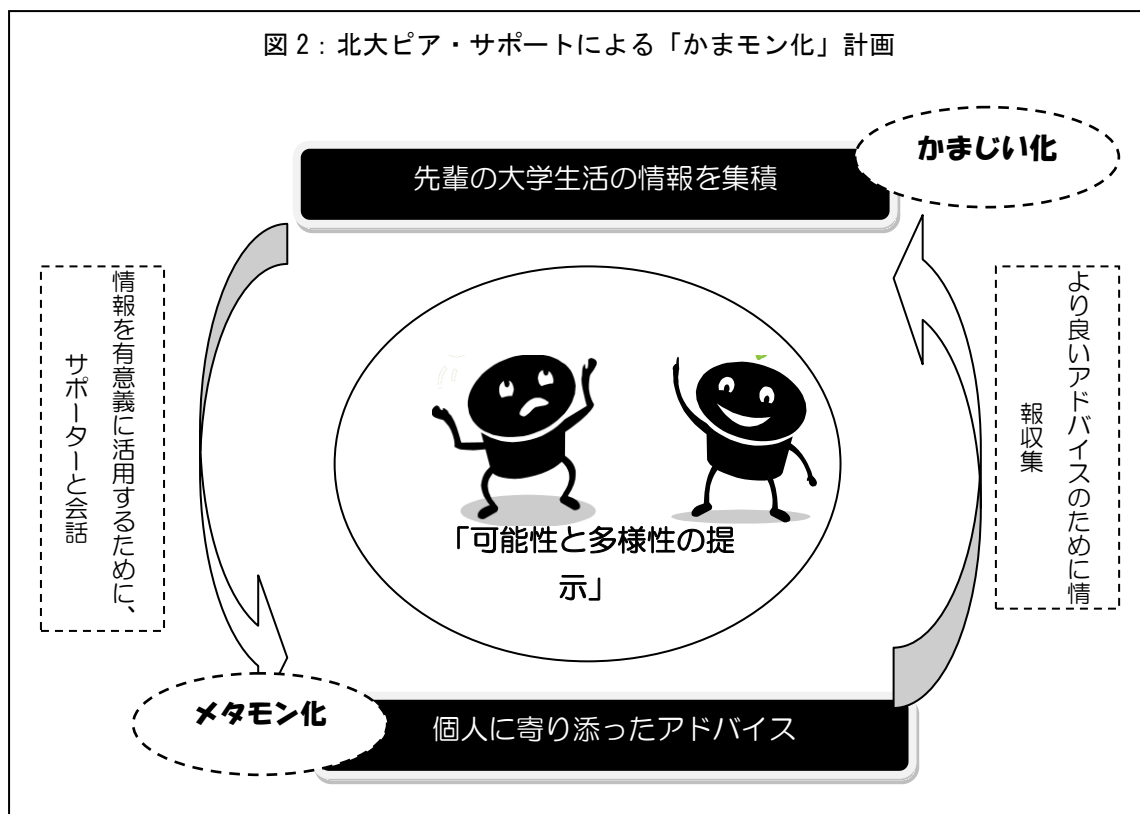
サポーターとの話し合いの中から、この方針を実行に移すための概念として、二つのキャラクターが示された。一つは、映画『千と千尋の神隠し』に登場するキャラクター「釜爺」である。このキャラクターは、物語の舞台となる湯屋で薬湯を調合する役目を担っており、彼の背後にはいつも巨大な引き出しが設置されている。巨大な引き出しには無数の薬が入られ、彼がその時に応じて必要となる薬を取り出す。話し合いでは、この「釜爺」のように、先輩やまわりの人々の様々な学生生活・学部情報を蓄積しよう、場合によってはいくつかの例を見せることで生活や進路の多様性を提示しようと提案がなされた。それによって、新たに挑戦したいことが見つかったり、何か気付かされる情報を手に入れることができるだろうという意見である。また一方で、何か新しい事に取り組みたい学生や、学部移行に困っている学生に対し、集めた情報を手当たり次第に渡すだけで十分と言えるのだろうかとの意見もあった。

ここで二つ目の概念として「メタモン」というキャラクターが出された。このキャラクターは、アニメやゲームで人気の「ポケットモンスター」の一つで、相手に「へんしん」する能力を持つ。「メタモン」のように相手になりきるとはいかないが、相手に寄り添い、相手の立場に立ちつつ、柔軟に対応をすべきだとの意見が出された。その人の考え方や学生生活のプランはその人独自のものであり、他の人の学生生活をそのままなぞることはできないだろう。サポーターとじっくり話すことで、これまでになかった考え方に気づいてもらうこと、あるいは新たな考え方を身につけてもらうことも重要であるという考えである。

『千と千尋の神隠し』の「釜爺」みたいに。「ほら、小さい頃流行ったポケモンの「メタモン」のように。」と、まだ概念を言葉では説明できない状態の時に例示された二つのキャラクターは、当のサポーター達にとっては納得のいく表現であった。そのため、1年生が今後の参考とできるように先輩の学生生活の情報を集める活動を「かまじい化」と呼び、ピア・サポートの利用者に向けた個々の対応によって可能性の発見に繋げる活動を「メタモン化」と呼ぶこととなった。この二つは相互に関係しており、どちらか一つに取り組みれば良いというものではないだろう。この二つの関係を、図2に示した。

学生から集めた情報を置いておく（「かまじい化」）だけでは、情報が上手く活かされない場合がある。それは、ある学生にとって有意義な体験が、そのまま他の学生に当てはまるわけではないからだ。また、先に挙げた学部移行の相談例のように、利用者自身が自分の可能性を最初から狭めてしまっている場合もある。例2で挙げたように、「高校時代に生物を選択していたので理学部に。」という考えを持ちながら、生物に関する情報のみを集めてしまえば、なかなか視野を広げることはできないだろう。そこで、相手個人に寄り添った話ができるよう「メタモン化」する必要がある。

図2：北大ピア・サポートによる「かまモン化」計画



一方で、利用者の立場に立って独自のアドバイスをしようとも（「メタモン化」）、私たちは完全に相手になり変わることはできない。相手の学生生活に何か役立つように、様々な選択肢を提示したり、柔軟に相談にのろうとしても、サポーターただ一人の経験を元にした受け答えには限度がある。相手の悩みを把握するには、より多くの学生生活の過ごし方をサポーター自身も知っておく必要があるだろう。そのためには、サポーター同士、そして多くの学生からも学生生活の話聞くこと、つまり「かまじい化」が最も有効である。

以上のように、「かまじい化」と「メタモン化」という二つの活動を並行して行う事で、学生生活における「可能性と多様性の提示」の実現を目指すこととした。北大ピア・サポートでは、これら二つを合わせて「かまモン化計画」と名付けて、2011年度後期以降の主な活動として取り組んでいる。

4. 実践に向けて

前述した通り、「かまモン化計画」を打ち出す前から、ピア・サポート活動の立て直しのためにイベントの提案がなされていた。一つは、7月に一度行ったピア・カフェを再度行おうというもの、もう一つはピア・サポートで学部紹介イベントを行おうというものであった。それに加え、例年通り本活（本報告書第8章参照）も行うことになり、これらのイベントを「かまモン化計画」に関連させて行うことにした。

「かまモン化計画」実施のためには、多様な学生生活情報の収集とそれを還元する場が必要になる。そのために、後期から来年度にかけて、まず12月に第2回ピア・カフェを、1

月下旬から新学期にかけて第3回本活を、そして新年度に学部紹介を行うという順序でイベントを組み、その実現を目指している。また、1月中旬には北海道大学のキャリア教育支援室と共に合同イベントを行い、「進路（インターンシップや就職）」という観点からの「可能性と多様性の提示」を試みた。以下、かまモン化計画におけるこれらのイベントの位置づけを述べる。

4. 1 第2回ピア・カフェ

ピア・サポート内で自分たちの1年生の頃を振り返ったものの、やはり現在の1年生がどのようなことを知りたいのか、何に不安を感じているのかを具体的に捉えておく必要があった。図1からもわかるように、ピア・カフェには1年生が多く集まる。そのため、再度提案されたカフェを12月に行うこととし、主に1年生に向けた質問を用意した。具体的には第6章で述べられるが、大学生活で力をいれたことから、学部や学科に関する質問、さらにキャリアに関する質問まで幅広く聞くこととした。

集まった回答は100人分を超え、それぞれ率直な意見や質問が書かれていたように思われる。これらを、1年生が知りたいこと、欲していることとして、以降のイベントへと繋げることにした。

4. 2 キャリア教育支援室との合同イベント

1月中旬には、キャリア教育支援室からの誘いをいただき、1年生に向けたキャリアに関するイベントを行った。インターンシップの紹介を通して、自分のキャリア形成や学生生活にどう役立てていけるかを1年生と共に考える機会となった。詳しくは第7章で述べられるが、このイベントもキャリアを軸とした「可能性と多様性の提示」であるといえる。

4. 3 第3回本活

ピア・サポートの設立から3回目となる今年度の本活は、12月のピア・カフェで集めた「1年生が気になること」に対して、3～4年生に回答してもらう機会として位置づけた。1回目の本活（2009年度）では本を提供してくれた学生にアンケートを実施しなかったため、本の提供者の内訳はわからないが、2回目の本活ではアンケート回答者全体の16.7%が3年生、37.8%が4年生、17.3%が修士の学生と、普段のピア・サポート室の利用者とは異なる層が参加していることが明らかになっている。そのため、第2回ピア・カフェで得た「1年生の気になること」に答えられる上級生が多く来室することを予想し、本の提供者には1枚のアンケートと10分間のインタビューを依頼することとした。形態としては、1年生の質問1つ1つに一問一答式で答えてもらうのではなく、質問をいくつかの分野に分類し、それに沿ってインタビューをし、大まかな流れの中で答えを見つけられるようにした。特定の質問だけでなく、ある程度幅広く「気になること」に対応するためである。2012年2月現在、まだ実施している最中であるが、詳しくは第8章で述べられる。

4. 4 学部&学生生活紹介

学部紹介を行うイベントを催したいとの提案も、かまモン化計画を立ち上げる以前になされた。これを、「多様な学生生活」を提供する機会として、一連のイベント実施の最後に行うこととした。当初は、期間限定のイベントとしていたが、学部や学生生活の情報は1年間通して求められるものであろうと考え、来年度からの通常業務に組み込む予定でいる。この企画については、詳しくは第9章で示される。

このように、2011年度後期はいくつかのイベントを「可能性と多様性の提示」という方針のもとでそれぞれを関連させて行っている。ピア・カフェで得た1年生の疑問を、キャリアイベントで答え、あるいは本活で上の学年に答えてもらい、それを将来的には通常業務として来年度から1年生に還元していく予定である。本来は、疑問を投げかけてくれた今年度の1年生に年度中に直接答える形にしたかったが、残念ながら間に合わず、来年度以降の1年生への提供となってしまったのが反省点である。そしてまた、現在実施中の本活でどれだけ多くの情報を得られるか、得た情報を活かしながらどのように丁寧に「可能性」と「多様性」を伝えていくかという点が、これからの課題である。

5. まとめ～ピア・サポートだからできること

学部移行に関しては、アカデミック・サポートをはじめ、各学部やさまざまな機関がサポートを行っている。確かにこれらの組織では、専門の職員の方々が、細やかな情報提供を行っているだろう。その中で、私たち学生がサポートできることは、先輩学生の生の声を後輩たちに届けることである。実際インタビューをしていると、学生たちは、教職員相手には構えてしまうだろう話題にも、我々ピア・サポーター相手には比較的気取らず、取り繕わずにいろいろと教えてくれることが多いように感じる。今後も学生だから集められる情報を用いて、学生なりのサポートを行っていくつもりである。

「可能性と多様性の提示」というのは、突き詰めればきりがなく、半年や1年で達成できるものではないだろう。情報は常に更新・蓄積されるべきであり、どのようにすれば上手く伝わるのかという工夫も必要となる。そして、何よりも学生と話すことで「可能性と多様性を提示」するためには、我々の姿勢とスキルが求められる。皆で理想を掲げてみたものの、実現に向けては様々なハードルがある。

「可能性」と「多様性」の存在を示すには、自分自身が常にそれらを抱いていなくてはならないはずである。「学生の発想は自由だ」と良く聞かすが、実はそれほど自由ではなく、それどころかいつのまにか大学（大学生）の常識や価値観によって見識が狭められているように感じることもある。例えば、「1年生のうちに単位を取れるだけ取っておいた方が良さ」とか、「友達は多い方が良い」、「学生生活を充実させるためにサークルに入るべき」、「3年生の秋には就職活動を始めなくてはならない」、「4年生は卒論とアルバイトを頑張って卒業旅行に行くものだ」など、私たちの中にいつの間にか根付いている大学生活の「常識」である。実際は、1年生のうちに単位を入れ過ぎて、授業をこなすことに追われ、学科や学

部の選択までしっかりと考えられなくなることもある。別に、友達は自分の居心地の良い関係が築けるほどでよいではないか。いない方が楽ならば、いなくてもよい。ピア・サポートには「学生目線」のサポートというものが期待されているが、少なくとも「可能性と多様性の提示」をするためには、このような「学生目線」に完全に入り込んではいないだろう。学生生活とは何か、学生とは何かを考え、大学（大学生）の常識を問い直し、客観的な視点に立つ必要がある。

今年度前期までは、学生や学生支援組織との「つながり」の創出を行ってきたが、今度はそこで生まれた「つながり」の上で、私たちピア・サポートが学生生活に有意義な提案を行える役割を担いたいと考えている。「学生生活における可能性と多様性の提示」はその一つである。試行錯誤を繰り返しながら、少しずつ形にしていきたい。

【参考】

北海道大学アドミッションセンター「北海道大学 総合入試案内パンフレット」
<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/nyu/pdf/sogo2011.pdf>